

活動のプロセスに注目し、成長を実感する 生徒の育成を目指すキャリア教育

－「基礎的・汎用的能力」を指標として－

田中 淳一（京都市総合教育センター研究課 研究員）

Key Words : キャリア教育, 各教科の学習, 基礎的・汎用的能力, 振り返り, 活動のプロセス

本研究で目指す生徒像は、活動のプロセスに注目し、成長を実感する生徒である。予測困難で先の見通しにくい現代だからこそ、自身の成長を確かに実感しながら生きていくことが大切であると考え。

このとき鍵となるのは、活動の成果だけでなく、プロセスにも注目して振り返ること、そして、生徒が成長を実感する視点を明確にすることである。そこで、キャリア教育を通して育む「基礎的・汎用的能力」を視点とすることで、活動のプロセスに注目することを促しつつ、生徒一人一人がより多面的に自身の成長を実感できるような実践を行った。

具体的には、生徒・指導者双方に「基礎的・汎用的能力」を意識化するための指標を作成し、各教科の学習において活用した。また、教科目標とともに「基礎的・汎用的能力」も視点とした振り返りを繰り返すことで、生徒が授業中のプロセスに注目し、成長を実感できるようにした。

実践を通して、生徒・指導者双方に「基礎的・汎用的能力」の意識化が促され、生徒には成長を実感する視点として、指導者には生徒の実態や成長を見取る視点として「基礎的・汎用的能力」の指標が活用された。

目 次

はじめに	1	第3章 実践の具体	
第1章 主題設定の理由		第1節 A校における実践	
第1節 活動のプロセスに注目する重要性		(1) 指導者に意識化	10
(1) 新学習指導要領から	1	(2) 指標の導入(生徒に意識化)	10
(2) 本研究で重点化する資質・能力 —「基礎的・汎用的能力」—	2	(3) 指標を活用した振り返り	10
(3) キャリア・パスポートの取組	4	第2節 B校における実践	
第2節 本研究で目指す生徒像について		(1) 指導者に意識化	13
(1) 1年次の研究から	4	(2) 指標の導入(生徒に意識化)	13
(2) 本研究の方向性	5	(3) 指標を活用した振り返り	14
第2章 研究の方策		第4章 研究の成果と課題	
第1節 本研究における全体の流れ	6	第1節 研究の成果	
第2節 活動のプロセスに注目し、成長を 実感する生徒の育成に向けて		(1) 生徒の記述内容から	18
(1) 「基礎的・汎用的能力」の指標	7	(2) 生徒・研究協力員へのアンケート及び 聞き取り調査から	18
(2) 振り返りを充実させるために	8	第2節 課題と今後の展望	
(3) 本研究の構想	9	(1) 実践から明らかになった課題	21
		(2) 今後に向けて	22
		おわりに	22

<研究担当> 田中 淳一 (京都市総合教育センター研究課 研究員)

<研究協力校> 京都市立岡崎中学校
京都市立栗陵中学校

<研究協力員> 森田 純代 (京都市立岡崎中学校教諭)
亀井 隆次 (京都市立栗陵中学校教諭)

はじめに

社会の変化が激しさを増している中、生徒は将来に向けてどんな力を身に付けたいと考えているのか。昨年度の研究実践において、研究協力校の生徒が記述してくれた。その内容を見ると、「読解力」「英語力」「プログラミング力」といった、日本における今日的課題ともいふべき内容を挙げている生徒が複数いたことに大変驚かされた。

これらの他に多くの生徒が記述していたのが、「相手のことを考える力」「協力」「コミュニケーション力」「計画力」「臨機応変に対応する力」といった力である。決して一般化はできないが、生徒の記述内容から二つのことを強く感じた。

一つは、多くの生徒が必要であると感じている力は、キャリア教育を通して育む「基礎的・汎用的能力」(詳しくは後述)に深く結び付いているということである。生徒へどのようにアプローチしていくかという意味においても、キャリア教育の充実が大きな鍵を握っているように思われる。

もう一つは、将来に向けて必要であると提唱されている力について、ほとんどの生徒が重要性を既に認識しているということである。学校生活を通して、そうした力を身に付けているということを生徒が実感できるような取組が大切であろう。

以上の内容は、本研究における実践と深く関わっている。生徒・指導者双方に「基礎的・汎用的能力」が意識化され、それらを視点として生徒自身が成長を実感することを通して、自分の将来と向き合う姿勢を高めてほしいと考えた。そのためには、活動の結果あるいは成果だけでなく、活動のプロセスに注目して振り返ることが重要になる。

本稿では、キャリア教育を通して育む資質・能力である「基礎的・汎用的能力」を視点としつつ、活動のプロセスに注目し、成長を実感する生徒の育成を目指すための方策、及び具体的な実践についてまとめている。また、1年次(昨年度)の研究は学校行事が中心であったが、本研究は各教科の授業を中心として実践を行った。

なお、京都市ではキャリア教育を「生き方探究教育」と呼んでいる。名称は違うが意味内容は同じであり、本稿では京都市の取組を表す部分にこの語を用いることとする。

第1章 主題設定の理由

第1節 活動のプロセスに注目する重要性

(1) 新学習指導要領から

社会の変化が目まぐるしく、予測困難な時代となっている中で、どのような生徒像を思い描きつつ学校教育を進めることが求められるのだろうか。

この問いに対して、様々な答えが挙げられるだろう。その中で、本研究では、活動のプロセスに注目し、成長を実感する生徒の育成を目指していきたいと考えた。

中学校では、新学習指導要領が令和3年度より全面実施となる。その中で、「学習評価の充実」の項目の一つに、以下のような記述がある(1)。

生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること。また、各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。

学習の成果だけでなく、プロセス(過程)にも注目して評価することの重要性が示されている。その上で積極的に評価することとされているのが生徒の良い点や進歩の状況であることもわかる。

そして、このような評価は、生徒・指導者双方にとって大切なものであるといえる。生徒にとっては学習したことの意義や価値の実感、及び学習意欲の向上に資すること、指導者にとっては指導の改善に生かすことが期待されているのである。

これに関わる内容として、新学習指導要領における別の部分では、以下のような記述がある(2)。

これからの学校では、(中略)、一人一人の生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手になることができるようにすることが求められる。

豊かな人生を切り拓く上で、自分のよさや可能性の認識、そして多様な他者との協働が鍵となる

ことが読み取れる。また、先に挙げた二つの記述を照らし合わせれば、生徒の良い点(自分のよさ)を認識・実感することの大切さが浮かび上がる。

本研究では、新学習指導要領に記述されている「自分の良い点(よさ)や可能性、進歩の状況」を、その生徒の「成長」ととらえる。生徒自身が活動の成果だけでなく、プロセスに注目して評価することにより、目標の実現に向けた活動によって得た成長をより実感できると考えられる。そうした成長の実感が、次の活動を通して更なる成長を目指す原動力となるのではないだろうか。

(2) 本研究で重点化する資質・能力

—「基礎的・汎用的能力」—

前項のような評価を実現するためには、振り返りが重要な役割を担うと考えられる。ただ、目標に照らした振り返りを行ったとき、特に何の意識もなければ生徒は目標を達成できた、あるいはできなかったという成果(結果)だけに注目して振り返ることが予想される。生徒が活動のプロセスに注目するためには、何を視点として振り返るか、という部分へのアプローチが必要であろう。

そこで本研究では、キャリア教育を通して育む資質・能力である「基礎的・汎用的能力」に注目する。「基礎的・汎用的能力」とは何か、そして、なぜ生徒に成長を実感させたい資質・能力として重点化するのか、順に整理しつつ論を進める。

○「基礎的・汎用的能力」とは

まず、「基礎的・汎用的能力」とはどのような能力なのかについて述べる。「基礎的・汎用的能力」が定義されたのは、平成23年1月31日に中央教育審議会が示した「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(以下、「在り方答申」)である。「在り方答申」においてキャリア教育は次のように定義されている(3)。

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

この定義から、キャリア教育では一人一人の社会的・職業的自立に焦点が当てられているとわかる。そして、そのために必要な基盤となる能力や態度として提唱されたのが、次の四つの能力として整理された「基礎的・汎用的能力」である(4)。

- ①人間関係形成・社会形成能力
- ②自己理解・自己管理能力
- ③課題対応能力
- ④キャリアプランニング能力

これらの「基礎的・汎用的能力」について、「在り方答申」では、「分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力であると考える」としている(5)。加えて、「社会人・職業人に必要とされる基礎的な能力と現在学校教育で育成している能力との接点を確認し、これらの能力育成をキャリア教育の視点に取り込んでいくことは、学校と社会・職業との接続を考える上で意義がある」とも述べている(6)。

本稿「はじめに」において、昨年度の研究実践について触れた。多くの生徒が、上に挙げる「基礎的・汎用的能力」に結び付くような力を身に付けていきたいと考えていた。今後は学校教育との接点を確認し、それらの力が身に付いていると実感できるような実践が大切になるといえよう。

なお、「基礎的・汎用的能力」として示されている四つの能力について、拙稿(7)でまとめている箇所があり、詳しくはそちらを参照されたい。

○「基礎的・汎用的能力」の重要性

では、本研究において、なぜ「基礎的・汎用的能力」を重点化するのか。それは、今後生徒に求められる極めて重要な資質・能力として、「基礎的・汎用的能力」が示されているからである。

先述した「在り方答申」に続いて、「キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書」(以下、報告書)が平成23年3月に示された。報告書では、「基礎的・汎用的能力」が各界から提示されている様々な力(「人間力」「就職基礎能力」「社会人基礎力」「学士力」)を参考としつつ開発されたものであることが概要としてまとめられている(8)。そして、「本答申(「在り方答申」:引用者注)は、基礎的・汎用的能力の確実な育成をキャリア教育の中心課題としている」(9)と指摘した上で、実践に当たっては「各界で提唱された様々な能力との整合性を図りつつ、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力であることを正しく理解する必要がある」と述べている(10)。

加えて、藤田は平成27年に立ち上げられたOECDの事業である「Education 2030」で提唱された、新たな時代に求められるコンピテンシー(資質・

能力)と比較しつつ、「基礎的・汎用的能力」の重要性が一層鮮明となることは言うまでもないと述べている。平成30年に第一次報告書としてまとめられた「The Future of Education and Skills」に示された、今後求められる資質・能力について、藤田がまとめている内容を一部抜粋する(11)。

①新たな価値を創造する力

急速に変化する社会においては、新しい製品・サービスのみならず、新たな仕事や社会モデルを他者と協力して生み出す力が必要である。

②緊張やジレンマの調整力

多様な立場や社会的背景をもつ人々がともに生き、同時に、格差や不平等が広がる社会においては、短絡的な思考を避け、競合・相反する考えが相互に影響を与え合っているという現実に応じた調整力が必要である。

③責任をとる力

上記の2つの資質・能力の基盤となる力である。自己をコントロールしつつ、自らの行動によって生じる結果を予測し、その結果によって責任をもって説明し、評価・検証できる力を意味する。

「基礎的・汎用的能力」である四つの能力は相互に関連し合っており、明確な区別ができるわけではないが、上に挙げた各能力について、①はキャリアプランニング能力、②は人間関係形成・社会形成能力、③は自己理解・自己管理能力及び課題対応能力と大きく関わりがあると考えられる。

以上の内容より、「基礎的・汎用的能力」は、それ以前に提唱された複数の「力」を参考としていること、そして、生徒にとって今後求められる極めて重要な資質・能力であることがわかる。

なお、新学習指導要領では、キャリア教育が明確に位置付けられている。例えば「生徒の発達を支える指導の充実」として、次の記述がある(12)。

生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。

この記述からも、キャリア教育の充実を図る中で、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤とな

る資質・能力、つまり「基礎的・汎用的能力」の育成が目指されていることがわかるであろう。

○生徒・指導者双方への意識化

さらに言えば、「基礎的・汎用的能力」は、本研究で注目する「活動のプロセス」において発揮される力である。藤田は、教科を通したキャリア教育について、以下のように述べている(13)。

ねらうべきは「教科の目標」だけ。当該単元の内容そのもの、あるいは、その単元のねらいを達成するための授業展開（指導手法など）の中に、キャリア教育としての価値が潜んでいる場合に、その価値を見だし、それを意識して指導することが「教科を通したキャリア教育」の姿です。

キャリア教育の価値（「基礎的・汎用的能力」の視点）を見だし、それを意識して指導することが大切といえる。そして、「ねらいを達成するための授業展開（指導手法など）の中」とあるが、これは本研究でいえば「活動のプロセス」である。

今までにも、指導者側が活動のプロセスに潜む「基礎的・汎用的能力」を意識して指導するという実践は、多く積み重ねられてきた。例えば、川上は小・中学校におけるキャリア教育の授業開発に関する考察を行う中で、「教師のみが、基礎的・汎用的能力の四つの能力を理解し、題材を指導するのではなく、生徒自身に対してもその意図を明確に示し、学習活動を行わせていく必要がある」と考え、授業展開のモデルを例示している(14)。

本研究でも、生徒が活動のプロセスに注目し、「基礎的・汎用的能力」を視点として成長を実感することをねらいとすべく、生徒に対しその意図を明確に示す。生徒にも「基礎的・汎用的能力」の理解を促すような実践は多くないが、もし意識化を図ることができれば、生徒が授業を通して成長を実感する視点が増えることにつながる。また、先述のとおり「基礎的・汎用的能力」は活動のプロセスにおいて発揮される資質・能力であることから、生徒が活動の成果だけでなくプロセスに注目する機運が高まることも期待できるであろう。

以上をまとめると、本研究では生徒が活動のプロセスに注目できるよう、「基礎的・汎用的能力」を視点とした振り返りの充実を図る。そしてプロセスに注目した振り返りをまとめる中で、生徒がより多面的に成長を実感できるような姿を目指す。

(3) キャリア・パスポートの取組

キャリア教育を推進する際の振り返り教材として、本年度より導入されたものがキャリア・パスポートである。平成28年12月21日に中央教育審議会によって示された「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」の「教材や教育環境の充実」という項目に、キャリア・パスポートについて以下のような記述がある(15)。

教育課程全体で行うキャリア教育の中で、特別活動が中核的に果たす役割を明確にするため、小学校から高等学校までの特別活動をはじめとしたキャリア教育に関わる活動について、学びのプロセスを記述し振り返ることができるポートフォリオ的な教材（「キャリア・パスポート（仮称）」）を作成することが求められる。

キャリア・パスポートが、学びのプロセスを記述し振り返ることができるポートフォリオ的な教材であると説明されている。特に、「学びのプロセスを記述し振り返る」という、本稿で今までに述べてきた内容と結びつくキーワードが含まれていることが確認できる。そこで本研究では、キャリア・パスポートの取組を活用しつつ進めていく。

また、中学校学習指導要領解説 特別活動編では、キャリア・パスポートを活用する意義として「生徒にとっては自己理解を深めるためのものとなり、教師にとっては生徒理解を深めるためのものとなる」ことを挙げている(16)。生徒は、学びのプロセスを記述する中で成長を実感することで自己理解を深めることができ、その様子を見取することで、指導者は生徒理解を深めることができる。

京都市では、キャリア・パスポートの名称を「生き方探究パスポート」として、今年度より取組が始まっている。本研究は京都市の運用に準じて進めるため、これ以降本稿で今年度の内容を示す部分は全て「生き方探究パスポート」と表記する。

生き方探究パスポートは、学年初めに実施される「わたし」と、学年末の「あゆみ」という2枚で構成されている。生き方探究パスポートは学年や校種をまたいで持ち上がり活用されるものであるが、本市では学年につき上記の2枚のみをファイルに綴じ、小学校から中学校、高等学校へと持ち上がることになっている。特に高等学校は今までの生き方探究パスポートが全て綴じられたファ

イルを受け取ることとなるが、枚数を精選することで、より積極的な活用を促すねらいがある。

生き方探究パスポートの取組を効果的にするためにも、学年初めから学年末の間に行われる活動の振り返りを記録としてまとめておくことが大切になる。そのような振り返りの充実及び蓄積こそが、この取組において最重要であり、生き方探究パスポートが、それぞれの学校で行われる様々な取組（今ある取組）をつないでくれるのである。

では、生き方探究パスポート「わたし」及び「あゆみ」において、どのような内容が大切にされているのだろうか。以下、3点に分けて整理する。

一つ目は、自己理解の深まりである。「わたし」には自分の持ち味等を記入する項目があり、自分を見つめる機会となる。そして「あゆみ」では1年を振り返り、残しておきたい出来事や場면을記述する項目があり、自分の成長を具体的にまとめられるようにすることが大切になる。

二つ目は、目標とそれに対する振り返りである。「わたし」において目標（なりたい自分）を設定し、「あゆみ」において、この1年どのような努力をしてきたか振り返ることが意図されている。

三つ目は、周りの大人からのコメントである。指導者や保護者等、周りの大人から肯定的な言葉をもらうことで、生徒はより成長を実感し、次の1年も一層成長できるように頑張ろうという前向きな姿勢が高まることが期待できる。

以上より、生き方探究パスポートの取組は、1年をサイクルとして目標設定とそれに対する振り返りを行う（繰り返す）ものであるといえる。目標達成に向けて努力する中で得た成長を記録として残しながら、自己理解を深め、更なる目標に向かっていく姿が目指されていると考えられる。

第2節 本研究で目指す生徒像について

本研究で目指す生徒像は「活動のプロセスに注目し、成長を実感する生徒」である。本節では、この生徒像に迫るための研究の方向性について述べる。そのために、まず1年次の研究を概観する。

(1) 1年次の研究から

1年次は、中学校におけるキャリア・パスポートの効果的な活用を目指して研究を行った。キャリア教育を通して育む「基礎的・汎用的能力」の中で、特に自己理解能力に注目し、実践を進めた。

具体的には、学校行事を中心として、自己理解を重要な視点として振り返りを積み重ね、次の取組へとつなぐことにより、生徒が自己理解を深め、学ぶ意欲を向上させることを主たるねらいとした。1年次の研究構想図を、以下に図1-1として示す。

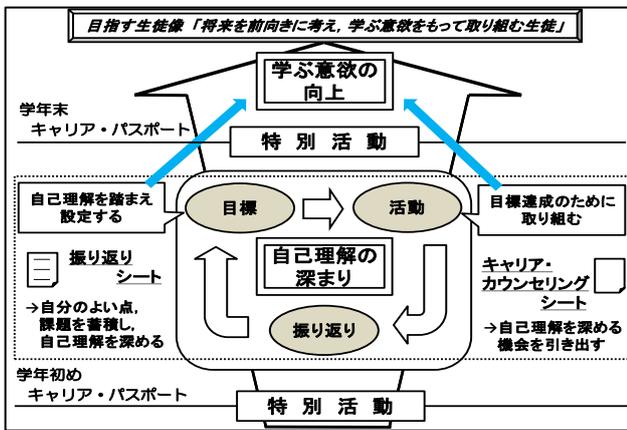


図1-1 1年次の研究構想図

京都市の運用に沿い、キャリア・パスポートを学年初め及び学年末の2枚として位置付けた。学年初めに記述した自己理解に関わる内容や目標を、1年間の学びとともに学年末で振り返ることができるよう、学校行事において自己理解を大切な視点として振り返りシートに蓄積した。具体的には自己理解の内容として、自分の良い点や頑張ったところを記入する項目と、自分の課題や今後取り組んでいきたいことを記入する項目を設定した。

また、生徒の自己理解を深めるきっかけを引き出せるような、指導者からの言葉がけを例示したキャリア・カウンセリングシートを作成し、指導者への手だてとした。こうした実践を積み重ね、学年末のキャリア・パスポートの取組を行ったところ、多くの生徒について、自己理解に関わる項目を積極的に書き進めたり、内容が詳しくなったりといった変容が見られた。また、その後に行ったアンケート(対象生徒は58名)を通して、8割以上の生徒が自己理解の深まり、そして学ぶ意欲の向上を実感していたことも明らかとなった。

以上のような成果があった反面、いくつかの課題も見えてきた。以下、2点に分けて整理する。

一つは、学校行事を中心とした実践であったため、振り返りをつなぐ対象とした学校行事のみで意欲の高まりが見られ、主たるねらいであった学ぶ意欲の向上が幅の広いものとならなかった点である。実際、学年初めのキャリア・パスポートに

学習面の目標を記入していたが、学年末には学校行事に関わる内容しか振り返りの蓄積がなく、目標に対する振り返りができなかった生徒が数名見られた。学校行事以外にも生徒が目標を立てたり、成長を感じたりする機会があることを痛感した。

もう一つは、生徒が学ぶ意欲の向上を実感できたことはアンケートから分かったものの、キャリア教育を通して育む「基礎的・汎用的能力」との関連性を一部しか示しておらず、キャリア教育の実践としての詳細な分析を行うことができなかった点である。1年次の研究では、振り返りで生徒が成長を実感していれば、自己理解を深めることができたと判断する自己理解能力の視点のみであったため、キャリア教育に関わる実践によりどの能力を伸ばしたことで学ぶ意欲を向上させたのか、明らかにすることができなかったのである。

(2) 本研究の方向性

第1節の内容及び1年次の研究から、本研究の方向性を次のように定める。

- 各教科の学習を中心として、キャリア教育の視点を意識した授業を実践する。
- 指導者だけでなく、生徒にも「基礎的・汎用的能力」の意識化を促す。
- 教科目標とともに「基礎的・汎用的能力」も視点として、生徒が活動のプロセスに注目して振り返ることを重視する。それが成長の実感につながり、今後の取組に一層努力しようとする原動力となるような実践を目指す。

まず、本研究では各教科の学習を中心に実践を進める。学校生活において大部分を占める各教科の授業で実践を積み重ねることで、生徒に「基礎的・汎用的能力」の意識化を継続的に促すことができると考える。1年次の課題を踏まえ、学習面での振り返りが充実するような実践を行う。

また、研究を通して生徒・指導者双方に「基礎的・汎用的能力」の意識化を図る。1年次の研究では、自己理解能力の視点だけでしか生徒の成長を見取ることができなかった。本研究を通して、生徒にとってはより多面的に成長を実感でき、指導者にとってはより多面的に生徒の姿を見取ることにつながるような機会となることを目指す。

目標達成に向けた活動のプロセスにおいて発揮

される「基礎的・汎用的能力」を生徒が意識化することで、できた、できなかったという結果だけでなく、その結果を生んだプロセスにより注目することができるようになることを考える。結果は変わらなかったが、活動のプロセスに注目すれば成長している部分があるかもしれない。その成長を見逃さず、生徒自身が実感し振り返ることができるようにすることが大きなねらいである。

次章では、活動のプロセスに注目し、成長を実感する生徒の育成を目指すための具体的な手だてについて述べていきたい。

- (1) 文部科学省 『中学校学習指導要領（平成29年告示）』
2018.3 p.24
- (2) 前掲(1) p.17
- (3) 文部科学省 『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』 2011.1.31 p.17
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf
2021.3.1
- (4) 前掲(3) pp.25～26
- (5) 前掲(3) p.24
- (6) 前掲(3) p.24
- (7) 拙稿 「中学校におけるキャリア・パスポートの効果的な活用に関する研究—自己理解の深まり、学ぶ意欲の向上を目指して—」『研究紀要—伝統と文化を受継ぎ、次代と自らの未来を創造する子どもを育てるために—』 2020.3 pp.122-123
- (8) 文部科学省・国立教育政策研究所生徒指導研究センター 『キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書』 2011.3 pp.31-33
https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/22career_shiryo_u/pdf/career_hattatsu_all.pdf 2021.3.1
- (9) 前掲(8) p.26
- (10) 前掲(8) p.34
- (11) 藤田晃之編 『キャリア教育』 ミネルヴァ書房 pp.167-168
- (12) 前掲(1) p.25
- (13) 藤田晃之 『キャリア教育フォービギナーズ』 実業の日本社 pp.247～248
- (14) 川上知子 「小・中学校におけるキャリア教育の授業開発に関する考察」『教育研究実践報告誌 3(1)』 2020.3 pp.21-26
- (15) 文部科学省 『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』 2016.12.21 pp.234-235 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf 2021.3.1
- (16) 文部科学省 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』 東山書房 2018.11.15 p.72

第2章 研究の方策

第1節 本研究における全体の流れ

本研究の具体的な方策を述べる前に、研究全体の流れを示しておく。研究の流れを先に説明することで、後述するそれぞれの方策がもつ意味がよりわかりやすくなるからである。

第1章で述べたとおり、本研究では生き方探究パスポートの取組を活用する。1年間の流れを時系列に沿って示すと、以下の図2-1のようになる。

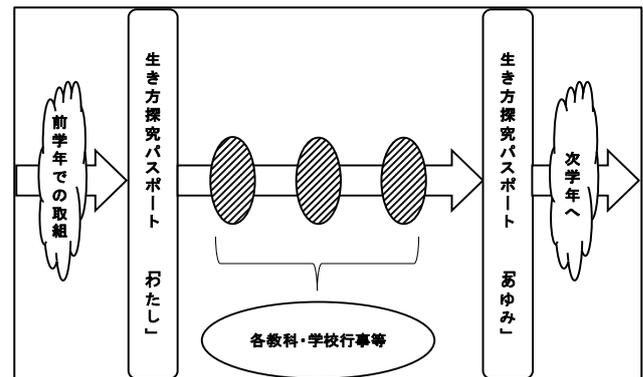


図2-1 研究全体の流れ

先述したとおり、生き方探究パスポートは学年初め「わたし」と学年末「あゆみ」の2枚である。これらにより、1年間を通した目標と振り返りのサイクルを意識することができる。「わたし」で立てた目標（なりたい自分）に近づくために各教科・学校行事等の取組を積み重ね、自身の成長を「あゆみ」に書き残す。それが次学年における「わたし」の目標設定につながる、という流れである。

本研究では、このようにして生き方探究パスポートの取組を活用することで、生徒が1年間を通して経験する様々な取組や活動を具体的に振り返り、継続的に成長を実感できるような姿を目指す。

このとき重要になるのは、図2-1の中央に位置する各教科・学校行事等の取組をどのように充実させるかである。昨年度に学校行事を中心として研究した知見を生かしつつ、本研究では各教科の学習を中心に実践を行う。そして生徒の振り返り、及び生き方探究パスポート「あゆみ」の記述内容からその効果を見取り、実践の有効性を検証する。

そのためには、①生徒・指導者双方に意識化し、生徒が成長を実感する視点となる「基礎的・汎用的能力」について整理すること、②振り返りを工夫すること、が大切になると考える。次節より、それぞれについて本研究で講じる方策を説明する。

第2節 活動のプロセスに注目し、成長を実感する生徒の育成に向けて

(1) 「基礎的・汎用的能力」の指標

本研究では各教科の学習において、生徒が「基礎的・汎用的能力」も視点としつつ活動のプロセスに注目して振り返ることにより、成長を実感できるような実践を目指している。しかし、「基礎的・汎用的能力」が、生徒と指導者に初めから意識化されていることは少ないと考えられる。そこで、「基礎的・汎用的能力」を整理した指標を作成した。その内容は、以下の表2-1のとおりである。

この指標は、国立教育政策研究所生徒指導研究センター作成の「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」(17)、京都市教育委員会作成の「京都市生き方探究(キャリア)教育スタンダード」(18)を参考にし、「基礎的・汎用的能力」の一例として独自に作成したものである。

また、この指標は生徒・指導者どちらにも活用されるものとして作成している。指導者だけでなく生徒も「基礎的・汎用的能力」の内容を意識化

し、共有できる指標となるよう作成した。

濱保らが指摘するように、「基礎的・汎用的能力」はキャリア発達に関わる諸能力として「生涯を通じて必要」であり(19)、生徒にとってはこの指標が将来にわたって活用できる視点となる。また、教師にとっては授業計画の際に、目標達成に向けて「基礎的・汎用的能力」が発揮される場面がないかを探る指標になるとともに、授業中に生徒の様子を見取る際の材料としても活用できる。

一方で、活用する際の注意点も挙げておく。まず、この指標に挙げた全12項目は、特に各教科の学習との接点を意識しながら、独自で絞り込んだものである。ゆえに、指標に挙げられた内容だけが「基礎的・汎用的能力」の全てではない。

また、一つの教科の中で、12項目全てを満たさなければならないと考える必要はない。教科ごとの特性や生徒の実態、学校教育目標等を踏まえ、項目をさらに焦点化し取り組むことも考えられる。

キャリア教育は学校教育全体で推進されるものである。指標にある行動指標を意識しつつ各教科・学校行事等との接点を探り、総体として各項目にアプローチしていくことが大切であろう。

表2-1 「基礎的・汎用的能力」の指標

各能力	京都市	番号	行動指標	行動指標につながる場面・考え方
人間関係形成 社会形成能力	人とともに 社会を生きる力	A-1	意見の違いに注目して聴く	<ul style="list-style-type: none"> お互いの意見を尊重し、他者の長所や感情を理解する 話している人の方を向き、自分の意見と照らしつつ聴く
		A-2	自分の考えを正確に伝える	<ul style="list-style-type: none"> わかりやすい発表になるような原稿を作る 伝えたい相手の方に体を向け、目を見てはっきりと話す
		A-3	他者と協働し、意見をまとめる	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの意見を比較し、全員が納得できる意見にする 司会、記録など、話し合いが円滑に進むよう役割を果たす
自己理解 自己管理能力	自分を知り 律する力	B-1	自分のよい点や強み、持ち味を知る	<ul style="list-style-type: none"> 様々な活動を通して、自分にとって興味・関心があるものを見つける 他者からのコメントにより、自分の一面に気付いたり、再認識したりする
		B-2	自分の得意な分野や方法を見つける	<ul style="list-style-type: none"> 自分の好きなことや得意なことを生かし、授業や取組等で貢献する 得意なことや成功体験を抛り所として自分の可能性を信じ、挑戦する
		B-3	達成感を次へのステップとして行動する	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを絶対視せず、感情をコントロールする 現状に満足せず、達成感を原動力として次の(より高い)目標を設定する
課題対応能力	課題を見つけ 解決する力	C-1	課題解決に向けて情報を集める	<ul style="list-style-type: none"> 教科書やICT等から、課題に関わる資料を集める 集めた資料の中から、課題解決に向けて使用する情報を選択する
		C-2	課題に対し計画を立てて処理・解決する	<ul style="list-style-type: none"> 課題に対し、まず自分でよく考え、計画を立てる 他者のアイデアに触れ、協力して課題を処理・解決する
		C-3	自分の計画を振り返り、次の課題に生かす	<ul style="list-style-type: none"> 取組の結果だけでなく、過程がどうであったかに注目して振り返る うまくいかなかった部分も振り返り、今後の活動で改善して取り組む
キャリア プランニング能力	夢や希望を つくりあげる力	D-1	学校での学びと将来のつながりを認識する	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活において、現在学んでいる内容が生かされていることを知る 将来のためにも、今を大切に学校での学びを進める
		D-2	働くことの意義を見いだす	<ul style="list-style-type: none"> 仕事をしている人の考えや価値観に触れ、働くことに対する自分の考えをもつ 責任をもって自分に与えられた役割を果たす経験を積む
		D-3	自分の進路や将来の生活について考える	<ul style="list-style-type: none"> 自分の住む地域社会や、今後の社会全体の変化について知る 自分の目指すべき進路あるいは将来を暫定的に計画し、行動する

では、指標の内容について具体的に説明する。まず、各能力の横に京都市が示す表現も記した。京都市ではそれぞれ、人間関係形成・社会形成能力を「人とともに社会を生きる力」、自己理解・自己管理能力を「自分を知り律する力」、課題対応能力を「課題を見つけ解決する力」、キャリアプランニング能力を「夢や希望をつくりあげる力」と表現している。これらの表現の方が理解しやすい生徒もいるのではないかと考え、指標に併記した。

人間関係形成・社会形成能力は、人との関わりに着目し、「聴く」「伝える」「意見をまとめる」という三つの指標とした。特に、意見の違いに注目することで、他者を尊重する姿勢や、自分の意見を見直す態度にもつながる。例えば授業でグループ活動を設定した際、どのような点を大切に活動してほしいか、指導者側にはねらいがある。そのとき、「意見の違いに注目してほしい」というねらいがあれば、指導者はそれが人間関係形成・社会形成能力の育成につながる行動となるものとして意識化した上で授業に臨むことができる。また、生徒にも指標が共有されることで、話し合う際のチェックポイントとして活用したり、振り返りの視点としたりすることができる。と考える。

自己理解・自己管理能力は、自分の良い点を実感することにつながるものである。授業では自分の得意な分野や方法を見つける中で、目標達成に向けて貢献できたと感じることもあるだろう。そして、活動を通して得た達成感を原動力として、次の行動につなげていくことが大切になる。

課題対応能力は、課題解決に向けた一連の取組を振り返る際の視点として働く。効率よく解決できたかということだけでなく、自分が立てた計画を振り返り、次の課題に生かすことも含まれる。また、課題解決に至らなかったとしても、課題に関わる情報を集めることができたか振り返ることも重要である。このように指標を用いることにより、目標が達成できた、あるいはできなかったという結果だけでなく、以前よりこの部分を取り組むことができたというプロセスに注目することが可能になると考えられる。つまり、生徒一人一人が自分なりの基準で成長を実感する機会につながるのであり、その経験をもとに次の取組へ向かっていくことができれば、活動に対する積極性もより高まるのではないだろうか。

キャリアプランニング能力において主眼となるのは、今学校で学んでいることが将来とつながっているという実感をもたせることである。

このことに関連して、辰巳は四つの能力を次のように説明している。以下に引用して示す(20)。

キャリア教育・職業教育特別部会で定義されたこの4つの能力は、端的には、対人基礎力・對自己基礎力・対課題基礎力、キャリアプランニング能力であり、前者の3つの基礎力は、経験を通じて獲得されるものである。

(中略)

キャリアプランニング能力は、他の3つの基礎力とは異なり、獲得のためには日常的な経験だけでなく、新たな知識の獲得が求められる。小学校段階から少しずつ自らの役割を果たしながら、自身の社会における「働き」や貢献を考える時間を設けるなど、意図された学習機会を設けることが必要だ。

辰巳は、キャリアプランニング能力以外の三つの能力を「基礎力」と表現し、それらは経験を通じて獲得されるものであるとしている。本研究では、それらの獲得につながるような行動指標を示し、生徒自身が各能力の重要性、及びそれらを視点としての成長を実感することがねらいである。

そして、キャリアプランニング能力については、意図された学習機会を設けることが必要であると指摘している。各教科の学習において、キャリアプランニング能力を育成することは、あと三つの能力に比べれば難しいといえるのかもしれない。例えば総合的な学習の時間等を活用し、自身の「働き」あるいは「働く」ことについて考える時間を設けることが必要になると考えられる。他には、キャリア教育において大きな役割を果たす職場体験学習も、辰巳が示す「意図された学習機会」としてとらえることができるといえよう。

以上の内容をもとに、この指標を生徒・指導者双方への「基礎的・汎用的能力」の意識化に向けた方策とする。生徒には自身を振り返る視点として、指導者には授業計画における視点や生徒の様子を見取る視点として活用していきたいと考えた。

(2) 振り返りを充実させるために

本項では、授業後の振り返りを充実させるためにどのように工夫するかについて述べる。前項に挙げた「基礎的・汎用的能力」の指標を活用するが、以下に挙げる工夫や留意点を踏まえ実践を進める。

工夫としては、指導者による授業前の意識化及び授業中の生徒に対する価値付けである。目標に近づくプロセスにおいて、関係する行動指標があ

るか事前に探り、意識化した上で授業に臨むことが大切である。そして、授業の中で指標にあるような行動が見られれば、肯定的な言葉がけにより積極的に価値付けることで、生徒にも徐々に能力が意識化されたり、その重要性を認識し今後の行動に生かしたりといった姿につながると考える。

振り返りの場面でも同じである。ただ、授業中に全員の内容を把握し、価値付けを行うことは不可能である。そこで授業後に生徒の記述に目を通し、波線を引いたりコメントを書いたりして価値付けていくことも有効であると考えられる。

留意点としては、授業後の振り返りが、「基礎的・汎用的能力」に関する内容のみにならないようにすることが挙げられる。第1章で述べたように、目指すのは教科等の目標であり、目標達成に向けたプロセスの中で発揮される「基礎的・汎用的能力」も視点として振り返るといことである。すなわち、目標を達成することができた（場合によっては達成できなかった）要因について振り返る際に、生徒が注目できるようにすることが大切になる。

最後に、本項の内容を示す具体例を一つ挙げる。社会科において、ある地方の文化に影響を与えるものは何か考えを深めることを目標とする授業を計画する。この際、授業展開において班活動を設け、その中で「意見の違いに注目して聴いてほしい」というねらいがあれば、指標と照らし合わせ「人間関係形成・社会形成能力」の育成につながる内容として意識化し、授業に臨むことができる。

授業では、例えば班活動に移る前に、指導者から「〇〇地方の文化に影響を与えるのは何なのか、班全員の発表をもとに、考えを深めましょう」と指導する。これにより、生徒は指標の内容を直接指示されたわけではないが、「考えを深めるということは他者の意見と自分の意見の違いに注目することが大切なのは」と、授業のポイントをつかむことにつながると考える。これが事前に意識化したことを生かした、指導者の仕掛けといえる。

生徒は実際に授業の中で、目標達成に向けて「基礎的・汎用的能力」を発揮する。指導者からの教え込みではなく、生徒が実感を伴って理解を深めていくよう指導者側が心がけることが大切である。

そして、授業後の振り返りにおいて、目標に対する振り返りを記入する。このとき、今回の授業を通して新たな学びを得ることができた要因に注目できることを目指す。例えば「意見の違いに注目して聴いたことで、地形だけでなく人口もその

地域の文化に影響を与えていることが分かりました」というように、指標にあるような「基礎的・汎用的能力」を発揮したことで、目標を達成する（達成に近づく）ことができたことが分かるような記述が生徒から出てくることを理想とする。

以上のようなサイクルを繰り返し行う中で、生徒が授業を通して活動のプロセスに注目し、成長を実感することができるよう実践を積み重ねる。

(3) 本研究の構想

今までの内容を踏まえ、本研究の構想を以下の図2-2のように表した。

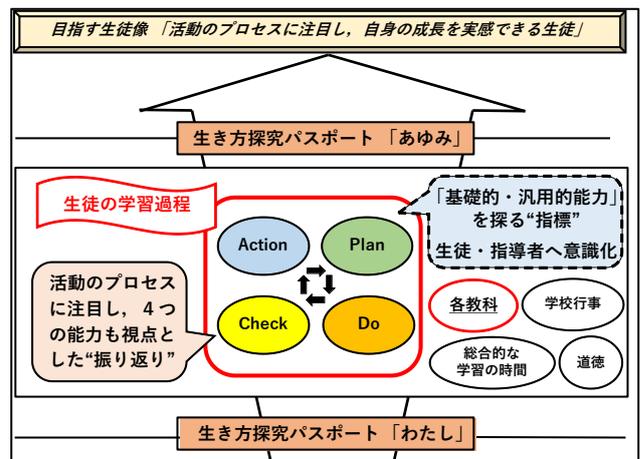


図2-2 研究構想図

前項で具体例として挙げたような学習過程を目指し、研究を進める。生き方探究パスポートの取組は、1年を通した目標と振り返りのサイクルである。「あゆみ」で充実した振り返りが行えるよう、本研究では特に各教科の学習を中心として実践を行う。本節で述べた「基礎的・汎用的能力」の指標及び振り返りの工夫を反映させながら、目指す生徒像に近づいていきたいと考える。

- (17) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 『職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)』 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo10/shiryo/attach/_icsFiles/afieldfile/2009/04/07/1260173_1.pdf 2021.3.1
- (18) 京都市教育委員会 『京都市生き方探究（キャリア）教育スタンダード』 <https://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/cmsfiles/contents/0000217/217994/sutandard.pdf>
- (19) 濱保和治・岡田大爾「キャリア発達を促す総合的な学習の時間の実践的な研究—中学校と大学との連携を通して—」『広島国際大学教職教室教育論叢(9)』 2017.12.20 pp.95-103
- (20) 小泉令三・古川雅文・西山久子編 『キーワード キャリア教育』北大路書房 p.154 *13章(辰巳哲子著)より引用

第3章 実践の具体

本章では、実践の具体について述べる。研究協力校として、京都市立中学校であるA校、B校の2校にご協力いただいた。なお、A校は今年度からとなる第1学年、B校は1年次に引き続き同じ生徒となる第3学年を対象学年とした。

各教科の学習として、A校で社会科、B校で数学科の授業実践を行った。本研究では生徒・指導者双方への「基礎的・汎用的能力」の意識化をねらいとしているため、それに関わる内容を取り上げながら、両校それぞれの実践について述べる。

第1節 A校における実践

(1) 指導者に意識化

A校では、第2章第2節(1)で示した「基礎的・汎用的能力」の指標(表2-1)をそのまま活用することとした。第1学年が対象ということもあり、中学校生活を通して身に付けてほしい資質・能力を一覧で提示したいという思いからである。

指導者は、指標に目を通した際、12項目の行動指標は生徒だけに当てはまるのではなく、指導者側にも自身の成長を実感するものとして発揮されるのではないかという考えをもっていた。このように、指導者側が自分事(生徒とともに成長する視点)をとらえ、指標が導入されることにより、一層指導者に意識化が促されると考えられる。

ただ、指標に挙げられた12項目について、「指標にあるから大事」という形の伝え方では生徒にとって受動的な教え込みとなり、生徒への十分な意識化が難しいと事前に予想した。そこで、生徒に指標を配布する前に、生徒自身が大切であると思う力をそれぞれで考えさせ、その内容も踏まえつつ指標を導入していくことを計画した。

(2) 指標の導入(生徒に意識化)

では、指標の導入にあたる授業の内容について述べる。社会科の授業のオリエンテーションとして実施したため、その後続く授業実践を詳しく取り上げる前に、本項で説明することとする。

この授業では、学校での授業や取組を通して、どんな力を付けたいか(付けることができるか)生徒に考えさせた。個人で考える時間を取った後

グループで意見を交換し、出し合った意見に見られる共通点を探り分類する活動を行った。例えばある班では以下の図3-1のような意見が出た。

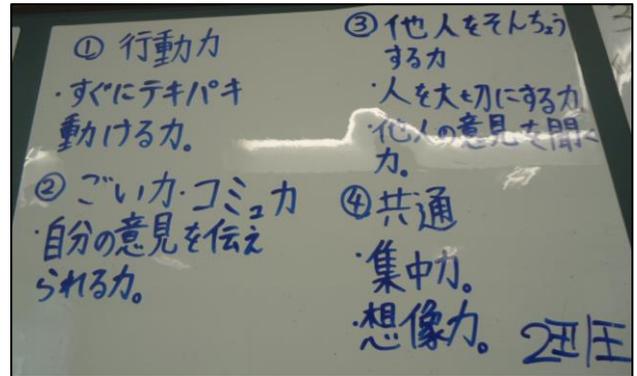


図3-1 ある班がまとめた「つけたい力」(B校)

班ごとに二〜四つの分類を考え、出てきた意見をまとめていた。その後代表者が発表し、全体を通しての共通点やキーワードを掴みつつ、今後に向けてどのような力が大切かクラスで共有した。

こうした活動の後、「基礎的・汎用的能力」の指標を全員に配布すると、先ほど自分たちで挙げた力との関連を踏まえつつ、真剣に指標を見る生徒の姿が見られた。最後に、今一度どのような力を今後付けていきたいか一人一人が意思決定した。

今回の授業を通して、指標の内容が生徒にとって受け身ではなく、自分事としてとらえることにつながったのではないかと考える。このようにして、指標は生徒全員に行き渡り、教室内に掲示もされた。今後展開される社会科の授業に向けて、指標を活用する準備が整ったともいえよう。

(3) 指標を活用した振り返り

では、社会科の実践において、どのような振り返りを行ったかについて述べる。まず、毎時間の振り返りの場面で指標を活用し、「基礎的・汎用的能力」の意識化を促すことをねらいとした。実際の振り返りは、次頁の図3-2のようなものである。

図3-2からわかるように、「C-1」「A-3」といった形式で、毎時間ごとに生徒が発揮したと考える行動指標の項目を書く欄を設けた。

生徒の記述をみると、行動指標に関わる内容が多く出てきていることがわかる。それに対し、指導者は大事な部分に線を引いたり、「いいね!」などと肯定的に価値付けたりするコメントを返している。このようなやり取りにより、生徒が活動のプロセスに注目する大切さや、自身の成長を一層実感することにつながると考えられる。

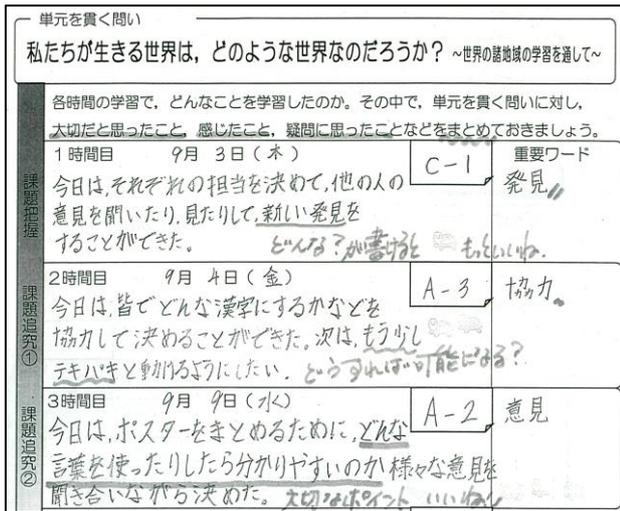


図 3-2 生徒の振り返り① (A校)

しかしながら、図 3-2 からわかるとおり、生徒にとって指標の影響力はとても強く、教科目標に対する振り返りが十分でなかった(指導者もそれに関するコメントを返している)。この単元では、「私たちが生きる世界は、どのような世界なのだろうか？」という単元を貫く問いを立てた上で、授業が展開されていた。この時点ではその問いに対する振り返りとなっていることが少なく、いわば本末転倒な内容となってしまっていたといえる。

そこで、次の単元からは、単元を貫く問いに対する振り返りが充実するよう、生徒との共通理解を図った。具体的には、単元を貫く問いを視野に入れつつ、本時の目標に沿った振り返りを積み重ねること、そして目標に迫る際に発揮した行動指標を挙げるという位置付けを指導者から明示した。

その後は、教科目標に対する振り返りを第一とし、特に指示がなくても自分で指標を確認しつつ振り返りを進める生徒の姿がみられた。振り返りの様子は、以下の図 3-3 のようなものである。



図 3-3 振り返りの様子 (A校)

例えば、アフリカ州を学習する単元での振り返りでは、右段の図 3-4 のような記述がみられた。

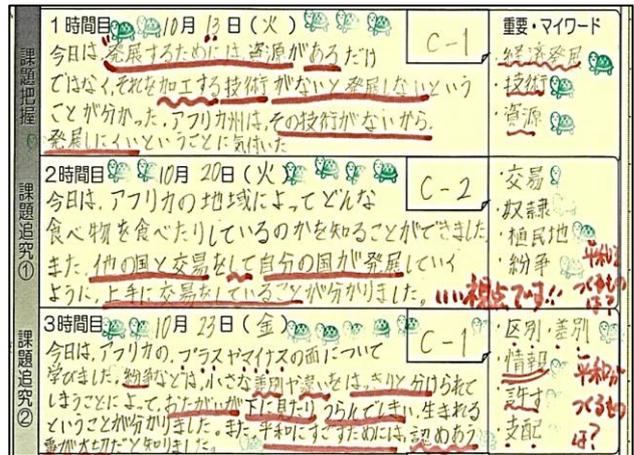


図 3-4 生徒の振り返り② (A校)

この振り返りは、図 3-2 と同じ生徒のものである。単元を通して、「国や地域が発展するためにどのようなことが大切になるか」をまとめることが教科目標として設定された。記述内容を見ると、協力、経済といったキーワードを取り上げつつ、学習を深めている様子が見える。図 3-2 と比較すれば、教科目標に迫るような振り返りの内容になっているといえよう。そして、そうした学びを得る際に発揮した力を、行動指標から選び記入するという位置付けに変わっているといえる。

さらに、指導者は教科目標に迫るような記述の部分に線を引いたり、記述内容の充実度に合わせ判子を押したりして、肯定的に価値付けている。

このような振り返りを、地理分野の学習全体を通して繰り返し積み重ねた。生徒が挙げた指標項目の内訳は、以下の表 3-1 のようになった。

表 3-1 生徒が挙げた行動指標の内訳 (地理分野)

項目	回数(回)	割合(%, N=303)	
A-1	50	16.5	41.3
A-2	33	10.9	
A-3	42	13.9	
B-1	12	4.0	18.1
B-2	21	6.9	
B-3	22	7.2	
C-1	68	22.4	36.0
C-2	22	7.3	
C-3	19	6.3	
D-1	8	2.6	4.6
D-2	4	1.3	
D-3	2	0.7	

表 3-1 からわかるとおり、項目で一番多かったのはC-1（課題解決に向けて情報を集める）、四つの能力のまとまりとしてみると最も多かったのはA（人間関係形成・社会形成能力）であった。

このような結果となった要因の一つは、授業展開にあると考える。先述のとおり、地理分野の学習は単元を貫く問いを（前半は教員が、後半は生徒自身が）立てて進められた。その問いに迫るために、例えば「世界各地の気候の違いは、それぞれの地域で人々の生活にどのような違いをあたえているのだろう」といった学習課題が毎時間設定され、授業が展開されていたのである。

生徒にとってすぐ答えの出るような課題ではないが、様々なデータ、そして友だちからの意見を参考にしつつ、自分の考えを深めていく。授業では教室内を動き、友だちから意見を聞く場面が度々設定された。図 3-5 はそのときの様子である。



図 3-5 授業における生徒の様子（A校）

この活動は、指導者が事前に指標と照らし合わせ、他者と協働し、意見をまとめる（指標A-3）、及び課題解決に向けて情報を集める（指標C-1）ことを特に意識化し、取り入れたものである。こうした場面設定も影響して、生徒が挙げる行動指標の項目に濃淡が出たものと考えられる。

さらに表 3-1 をみると、地理分野の学習全体を通して、全ての項目に対し、発揮したことを実感した生徒がいたことがわかった。中でもキャリアプランニング能力を挙げる生徒は少なかったが、単元の最後（または最後に近い授業）でこの能力について注目する生徒がいた。学習を進めるにつれて、現在学んでいることと将来とのつながりを実感する生徒が出てきていることがうかがえた。

以上の内容から、教師があらかじめ授業展開に込めた「基礎的・汎用的能力」は、多くの生徒に伝わり、意識化されることがわかった。

加えて、生徒が「基礎的・汎用的能力」も視点として成長を確かに実感するために、毎時間の振り返りを生かしつつ、ある程度の期間を設定して

定期的な振り返りも行った。実際に、ある生徒が記述した内容は以下の図 3-6 のとおりである。

世界の諸地域 → 課題把握 → 課題追究 → 課題解決 → 新たな課題
単元を貫く問い：私たちが生きる世界は、どのような世界なのだろうか？
 ～3つの州の学習を通して～

学部の課題 北アメリカ州、南アメリカ州、アジア州の学習を振り返り、前回に比べて成長した部分や、この先の学習をする上で大切な力は何か考えよう。

① 3つの州の学習をもとに、共通する大切なキーワードを確認しよう。
 前回の振り返りを見ながら、前回と同じキーワードは色を変えて書こう。

② 3つの州の単元を貫く問いに対する自分の考えをまとめ、学習を進めていくにつれ、どのような変化や深まり、学びがあったのだろうか？
 ・教科書やノートに書いてあることを、そのまま書いていただけ
 この学習を通して「調べてことや、知ったこと、考えた自分の意見を書くことが出来るようになった」。

③ 前回の振り返りと比べ、自分が成長したと感じる部分は何だろうか？
 また、「こうすればよかった」とか、今後の課題と感じることもまとめよう。
 ・もう少し自分の考えを「よくまとめたり、友達の考えたことやキーワードを使って今後に活かせるようにしたいです」。

④ 年明けから、歴史の授業に入ります。歴史の学習を進めるにあたり、地理で学習したどんな力や考え方を発揮したい（できる）と思いますか？
 ・教科書から知ったことを活かして自分の考えを正確に、伝えることが出来るようにしていきたいです。

図 3-6 定期的な振り返り（A校）

図 3-6 の振り返りは、三つの州を学習した段階で行ったものである。四つの項目からなり、①まず他者と交流もしつつ、社会科の教科目標（単元を貫く問い）につながるようなキーワードを整理した。そして、②どのような学びがあったか、③自分の成長や課題、④今後の授業で発揮したい力について、それぞれまとめる項目を設定した。

生徒はこの振り返りを通して、単元を貫く問いに注目しつつ、学びを深めることにつながった要因を言語化することができた。図 3-11 の生徒は、①でキーワードをまとめ、②で自分の意見を書くことができるようになったという「進歩の状況」（成長）をまとめている。③では今後の課題として、自分の考えをまとめることに加え、友だちの考えたことも生かせるようになりたいと記述しており、先述した授業展開が大きく影響しているものと考えられる。そして④の記述から、この生徒が社会科の授業を通して「自分の考えを正確に伝える」という「基礎的・汎用的能力」（指標A-2）の重要性に気付いていることがうかがえる。

この振り返りを行う際、指導者から「基礎的・汎用的能力」の指標を用いるように指示はしなかった。その中で、多くの生徒が指標に関わる内容を記述し、自身の成長を言語化していた。

第2節 B校における実践

(1) 指導者に意識化

B校では、第3学年である生徒の実態及び数学科のもつ特性を踏まえ、指標から更に七つの項目に絞り、生徒に提示することとした。数学科を通して生徒に身に付けさせたい「基礎的・汎用的能力」を焦点化することで、それらを示す項目に生徒がより注目しやすくなると考えられる。このようにして、事前に指標の内容について検討し、付きたい力を明確にすることが大切である。

そして、七つの項目を「基礎的・汎用的能力」の指標に設定し、生徒にプリントを配布することにした。以下の図3-7が、A校で作成された「基礎的・汎用的能力」の指標プリントである。

数学の授業(活動)を通して、どんな力がつづけるかな？
今日の授業を振り返ってみよう！



「数学の授業(活動)を通して、いろいろな力(例えば下のような力)がつけられると考えています。これらの力は、みんなが将来を切り拓く上で、大切なものばかりです。普段の振り返りを少し、深めてみませんか。今日の授業は、どの程度理解ができたかな？学んだ内容は？どんな力がつけられるかな？この作業を少しずつ重ね、新しい学び、確かな力につなげていきましょう。」

★A) 人とともに社会を生きる力	
①意見の違いに注目して聴く	話している人の方を向き、自分の意見と合わせながら聴くことができる。
②自分の考えを正確に伝える	相手に分かりやすい説明をすることを心がけ、自分の考えを発表することができる。
③他者と協働し、意見をまとめる	それぞれの意見を比較し、全員が納得できる意見にするため、自分の役割を果たすことができる。
★B) 自分を知る力	
④自分のよい点や強み、持ち味を知る	さまざまな活動を通して、自分にとって興味・関心があるものを見つけることができる。
⑤自分の得意な分野や方法を見つける	自分の好きなことや得意なことを生かし、授業や活動等で貢献できる。
★C) 課題を見つけ解決する力	
⑥課題に対し計画を立てて処理・解決する	他者のアイデアに触れ、協力して課題を処理・解決できる。
★D) 夢や希望をつくりあげる力	
⑦学校での学びと将来のつながりを認識する	日常生活において、現在学んでいる内容が生かされていることを知ることができる。

図3-7 「基礎的・汎用的能力」の指標プリント(A校)

図3-7の指標プリントで焦点化して設定された七つの項目について、以下に設定理由を述べる。

「A) 人とともに社会を生きる力」は、こちらが提示した指標と同じ三つの項目が設定された。他者ととともに協働して取り組むことを、授業の中で大切にしたいという指導者の思いからである。

「B) 自分を知る力」は、二つの項目が設定さ

れた。難しい問題に直面すると、なかなか解き進められない(結果を出せない)自分に対し自信を失いがちである。こうした実態に即し、活動の結果だけでなくプロセスにも注目しつつ、自分の強みや持ち味、得意な方法等を知ること、特に肯定的な自己理解を高めることをねらいとした。

「C) 課題を見つけ解決する力」は、数学科の特性を踏まえ、計画的に課題を処理・解決するという視点に焦点化して項目を設定することとした。

「D) 夢や希望をつくりあげる力」は、根幹である「学校での学びと将来のつながり」に関する項目に焦点化し、一つの項目として設定した。

図3-7のプリント作成を通して、指導者は生徒の姿を思い浮かべながら、「基礎的・汎用的能力」の視点を意識化することができた。このように、授業を通して生徒に付きたい力を事前に明確化しておくことで、授業中に生徒が指標にあるような行動を取った際、指導者から効果的に価値付け、更なる成長を促すことが可能になると考える。

(2) 指標の導入(生徒に意識化)

A校では、図3-7で示した指標プリントを、ある数学科の授業において導入することとした。

では、その授業内容について述べる。単元は「図形と相似」、本時の目標は「友だちと意見を出し合い、これまでに学習した比を組み合わせることで問題を解決できる」とした。この目標は、少し「基礎的・汎用的能力」に寄せた内容となっている。指標の導入を兼ねつつ、授業に対し積極的な姿勢が見られることをねらい、このような文言とした。

授業で提示されたのは、これまでに学習した比を複数組み合わせなければ解決できない課題である。今までに比べ難易度は高いが、友だちと意見を出し合うことで解決に向かう(近づく)ことが目標である。グループ活動を行う前に本時の目標を再度確認し、最後に全体で考えを共有した。

そして、授業終わりの振り返りを行う前に、生徒へ指標プリント(図3-7)を配布した。指導者は、本時の目標に「友だちと意見を出し合い」と明示したことにも触れながら、数学科の授業において指標に示された視点を意識しつつ授業に臨んでいることを伝えた。そして、今後振り返りを行う際の視点として活用していくことを共有した。

生徒は、指標プリントに対し真剣に目を通して

生徒Bは、課題の半分以上を自力で解き進めることができた。解けなかった部分は友だちに教えてもらい、他の友だちにも教えるという教え合いを通して、理解を深めている様子が見える。

また、生徒Bはグループを代表して発表する役割を担った。発表を経験し、全体の場でわかりやすく伝えることの難しさを感じていた。発表自体に納得はしていない様子であったが、本時の授業を通して「自分の考えを正確に伝える」ことを頑張ったと振り返り、具体的に記述していた。

これら2名の生徒の記述から、「基礎的・汎用的能力」を視点とした振り返りによって、各生徒の理解度に応じて、活動のプロセスに注目し、授業で得た学びや成長、今後に向けて頑張る内容をまとめることにつながる可能性が示唆された。

なお、この授業において、生徒が頑張れた項目として挙げた行動指標の内訳は、以下の表3-2のようになった。

表3-2 生徒が挙げた行動指標の内訳（図形と相似）

項目	人数(人)	割合(%, N=44)	
A-①	10	22.7	63.6
A-②	7	15.9	
A-③	11	25.0	
B-④	5	11.4	11.4
B-⑤	0	0	
C-⑥	10	22.7	22.7
D-⑦	0	0	0
未記入	1	2.3	2.3

指導者が事前に意識化していた、A（人間関係形成・社会形成能力）の項目が合わせて63.6%となった。授業を通して、多くの生徒にとっても意識化する場面があったことがうかがえる。

また、それ以外の項目を挙げた生徒もいた。多かったのはC-⑥、課題対応能力である。本時の学習過程と指標に示された内容との重なりを感じ、振り返りの視点としたことが要因と考えられる。

他には、B-④、自己理解・自己管理能力を挙げる生徒もいた。その振り返りをみると、予想以上に問題が解けたという達成感を、自分の良い点や強みとして挙げている傾向があった。授業の中で得た成功体験等は、生徒にとって自己理解・自己管理能力に関わるものにとらえられることが示唆された。だが同じ自己理解・自己管理能力の項目

であるB-⑤を挙げた生徒はおらず、本時では、生徒にとっては「自分の得意な分野や方法」よりも「自分の良い点や強み」として認識され、振り返りに反映されていたことがわかった。

加えて、D-⑦、キャリアプランニング能力を挙げる生徒もいなかった。第2章で触れたが、やはり授業の文脈において特にキャリアプランニング能力を取り上げることは、意図した学習機会でない限り難しいのではないかと感じられた。このように、指標を一つの材料として授業を振り返ることで、指導者は、生徒の授業に対するとらえ方を資質・能力ベースで把握することができ、生徒理解を更に深めたり、今後の授業計画に反映させることができたりといった効果があると考えられる。

しかし一方、この時点で一つの課題も見えてきた。最も大切である教科目標に対する振り返りが、まだ十分であるとはいえないことである。前ページの生徒Aは今までに学習した比を挙げ、それらの比が意味することを、問題を解く度に思い出したいと記述しているが、具体的にどのようなことを意味するのか言及できればより充実した振り返りになると考えられる。また、生徒Bについても、自分の意見を正確に伝えることや、教え合いの重要性に気付くことができているが、それによって何を学んだかについては触れられていない。

今回は指標の導入も兼ねた授業であったが、次回以降は、特に振り返り項目【2】で教科目標に対する振り返りが充実するよう、教師から振り返りの目的を明示していく必要があると考えた。

このような反省を踏まえ、実践が積み重ねられた。本稿では、その中から関数の授業を取り上げ、実践の具体を説明する。単元は「いろいろな関数」であり、本時の目標は「グラフを読み取り、条件を満たす水そうの設定を考えることができる」とした。今までに学習した内容で表せない関数を取り上げ、考察することを通して、グラフの読み取り方について理解を深めることが目標である。

指導者が事前に意識化した指標項目は、A-③（他者と協働し、意見をまとめる：人間関係形成・社会形成能力）、及びC-⑥（課題に対し計画を立てて処理・解決する：課題対応能力）である。それぞれへの意識化を促すために、「今までに見たことが無いようなグラフについて考えるので、グループでどう取り組むかがとても大切です。学習してきた内容を生かして、他のグループに対しわかりやすく発表できるよう、今から取り組んでみま

しょう」と、指導者からの明示的な指導を行った。

また、グラフにおける直線の傾きが、水そうに入る水量の変化の様子を表わしているという、教科目標に迫る内容へアプローチするために、他者に説明する際にはグラフの変化が何を表わしているか具体的に伝えることもポイントとして明示した。まとめると、指導者は本時において、以下の3点をグループで話し合う目的として示した。

- 今までに学習してきた内容を生かすこと
- 他のグループにわかりやすく発表できるような説明を、自分のグループで考えること
- グラフの値の変化が表す内容について、他者と意見を出し合うこと

授業では、以下の図 3-11 のような話し合いの様子が見られ、最後に全体で意見を共有した。



図 3-11 グループ活動の様子 (いろいろな関数)

この授業後、生徒が記述した振り返りにについて以下に取り上げる。先述した反省点を踏まえたことで、振り返り項目【2】の記述が教科目標に対するものとしてより充実した内容になった。例えばある生徒は、本時の授業で学んだこととして、

xが増えてもyが一定になるのが少し分からない所があったのでもう一度振り返りたいと思いました。水そうの中に段差があったりなど何かが入ってたりすると関数の傾きもかわることが知れてよかったです。

と記述した。「xが増えてもyが一定になる」のは、本時の課題でいえば水は出し続けているのに水面の高さが変化していない状況を指す。この状況を作り上げるような水そう(の中にある段差)の設

定を考えることが主眼であり、その点についても一度振り返りたいと記述している。一方で、段差があれば関数の傾きが変わるという対応関係については、本時を通して理解することができたととらえられる。左段に挙げた指導者の明示したポイントを踏まえ、教科目標に対する振り返りを自分なりに進めている様子が見えかけた。

さらに、先述した生徒A、生徒B(p.14)の振り返りにについても見ていきたい。まず、生徒Aの記述内容は、以下の図 3-12 のとおりである。

単元名	関数	本時の目標	グラフを振り返り、グラフをみた水槽の設定を考えることである。
[1]	本時の目標に対する理解度を考え ましよう。 5 4 3 2 1 1-0-1-1-1	[3]	本時の授業で、頑張れた項目を考え ましよう。 ① -
[2]	本時の授業で学んだこと、疑問に思ったこと書きましよう。 面積が広くなると傾きが小さくなるということが分かりました。	[4]	理解度が3~5の人は、できたと実感した理由を、1~2の人は、何を頑張るかを書きましよう。 初めは水位点から[さ]は少ないのかと疑問を抱くと元々[さ]は多いと[さ]を想定して、なるほどと思えました。

図 3-12 生徒Aの振り返り (いろいろな関数)

生徒Aは、今までと比べ、本時の目標に対する理解度を高く自己評価していた。項目【2】を見ると、本時の課題において部分的に当てはまる内容である、「面積が広くなると傾きが小さくなる」という、教科目標に迫る内容の記述が出てきた。

そして、本時の授業で発揮した指標項目としてA-①(意見の違いに注目して聴く)を挙げ、先述した「図形と相似」の振り返りで挙げた項目と同じであった。項目【4】の記述からもわかるように、課題に対してもっていた疑問について、意見の違いに注目して聴くことで、「なるほどな」と実感を得て学びを深める姿につながっている。

先述したとおり、生徒Aは数学があまり得意でないが、友だちからの意見に注目して聴くことが教科目標の達成に向けて大切であることに気づき、授業において繰り返し行動に移すことで、自分なりに理解を深める様子が見られた。生徒Aが指標項目の一つを活動する際の視点として意識し、活動のプロセスに注目して振り返ったことで、教科内容への理解度の高まりを実感できたといえよう。

次に、生徒Bの記述内容は、次ページの図 3-13 のとおりである。

単元名	本時の目標
関数	グラフを読み取り、グラフを基に水槽の設定を考えることができる。
【1】本時の目標に対する理解度を考え ましよう。 5 4 ③ 2 1 --- --- --- ---	【3】本時の授業で、頑張れた項目を考え ましよう。 C - ⑥
【2】本時の授業で学んだこと、疑問に思った こと書きましよう。 グラフの考えを聞かせ、自分の感想がある んだと驚きました。私は全然思いつけな かたので、頭の柔軟性を高めるように思 い、グラフの「 \square 」を「 \square 」で し、グラフの「 \square 」を「 \square 」で	【4】理解度が3~5の人は、できたと実感した 理由を、1~2の人は、何を頑張るかを 書きましよう。 理解はできたけれど、それをも説明でき なかつたので、説明が 返して理解を深めようと思います。

図 3-12 生徒Bの振り返り（いろいろな関数）

生徒Bは、本時の課題をどのように解決していけばよいか悩んでいる様子であった。その一端が振り返りからもわかるが、項目【2】において、別のグラフであればどういった水そうになるかという新たな疑問について記述していることに注目したい。理解度はまずまずという自己評価であるものの、生徒Bが本時の内容に対する学習意欲を高めている様子としてとらえられるであろう。

授業で特に発揮した指標項目としてはC-⑥（課題に対し計画を立てて処理・解決する）を挙げており、指導者が事前に意識化した項目を生徒Bも意識していたことがわかった。先述した「図形と相似」の振り返りではA-②（自分の考えを正確に伝える）を挙げており、生徒Bが数学科の授業を通して徐々に意識化した姿があった。項目【4】の記述を見ても、人に説明できることを、自身の理解度を測る基準としている様子が見える。

本時では、自分の考えを伝えるよりも、友だちの意見を参考にしながら課題を解決していくことが主眼となったため、生徒Bが指標項目のC-⑥を挙げ、振り返りに反映させたものと考えられる。

以上のような記述内容から、単元ごとに指標を活用した実践・振り返りを積み重ねることで、生徒に活動のプロセスにおいて発揮される視点が徐々に意識化され、それが教科目標に迫る上で大きな役割を果たす可能性が示唆された。

そして、社会科（A校）、数学科（B校）での実践を通して、生徒にとって指標の影響力がとても強いことに留意し、教科目標を第一とした振り返りである点を強調することの必要性を痛感した。

なお、「いろいろな関数」の授業において、生徒が頑張れた項目として挙げた行動指標の内訳は、右段の表3-3のようになった。

表 3-3 生徒が挙げた行動指標の内訳（いろいろな関数）

項目	人数(人)	割合(%, N=20)	
A-①	7	35.0	85.0
A-②	3	15.0	
A-③	7	35.0	
B-④	1	5.0	5.0
B-⑤	0	0	
C-⑥	2	10.0	10.0
D-⑦	0	0	0

先述した「図形と相似」の授業と同様に、項目A（人間関係形成・社会形成能力）を挙げる生徒が多かった。指導者が事前に意識化した項目は、A-③（他者と協働し、意見をまとめる）、C-⑥（課題に対し計画を立てて処理・解決する）の二つであったが、半分弱の生徒について、それらの項目を意識する場面があったことがうかがえた。

事前に予想していたよりも、A-①（意見の違いに注目して聴く）を挙げる生徒が多く見られた。本時では今までに学習した内容で表せない関数を取り上げたため、自身の考えと照らし合わせながら、友だちの意見に耳を傾けることが重要になっていた。指導者が指標プリントを作成する際に込めた思いである、他者と協働することの大切さを伝えるという内容は、数学科の授業を通して、生徒にある程度意識化されたのではないかと考える。

一方で、今回の授業においても、B-⑤（自分の得意な分野や方法を見つける）、及びD-⑦（学校での学びと将来のつながりを認識する）を選ぶ生徒はいなかった。指導者が事前に意識化していない項目であり、生徒が特に発揮したと思う項目を自身で振り返って挙げるのが大切であることから、特定の項目が挙がらなかったこと自体が悪いというわけではない。ただ、教科目標に迫るプロセスで、これらの項目を発揮するような数学科の授業はどのようなものか、考える契機になった。

これには、第3学年が対象であったことも関係しているかもしれない。推測の域を出ないが、例えば第1学年であれば、中学校数学と出会い、「自分の得意な分野が見つかった！」と感じ、指標B-⑤を挙げる生徒が出てきやすい可能性がある。

以上については今後の課題として、様々な学年や単元において実践を積み重ねたいと考えている。

第4章 研究の成果と課題

第1節 研究の成果

(1) 生徒の記述内容から

第3章で取り上げた生徒の記述内容から、各校での実践が、生徒・指導者双方への「基礎的・汎用的能力」の意識化につながったと考える。

また、全員ではないが、「基礎的・汎用的能力」を発揮する重要性に気付いた生徒も出てきた。実践途中より、指標の活用を指導者から指示しなくなったにも関わらず、「C-3のように、計画の振り返りをするという考え方はとても大切だと思う」という内容の振り返りもあった。

そして、実践の締め括りとして、生き方探究パスポート「あゆみ」の授業を行った。先述のとおり、「あゆみ」の主な項目は①この1年間で印象に残った出来事や場面、②なりたい自分に向けて、どんな努力をしてきたか、の二つである。

1年次の研究では、学習面に关わる内容が少なく、項目①で2名、②で半分弱ほどの生徒が記述していた。しかし、本研究では、例えばB校において、①で学習に关わる記述をした生徒が24名中6名おり、②では実に19名の生徒が学習面に触れていた。本研究の実践が全てではないが、学習面に注目する生徒が増えたことを確認できた。

もちろん学習面以外の、部活動や学校行事等について記述する生徒も多くいた。その中で、本研究の成果であると考えるのは、1年次の研究と比べ、学習面に注目して振り返る材料を生徒に提供することができた点である。生徒がより多面的に自分を見つめ、成長を実感する機会となった。

内容については、「ノートをうまくつくることができた」という学習方法面について、「なりたい自分に向けて、勉強の計画を立てた」という計画面について、「みんなの前で話すのをがんばった」という授業の場面を思い出しての振り返りがあった。今まで蓄積した振り返りを改めて見ながら、学習面で自身の成長した部分に注目できていた。

また、次のような記述もあった。B校のある生徒は、なりたい自分(学習面)として、「苦手なものでがんばる」ことを挙げており、社会科(地理分野)に対して苦手意識をもっていた。しかしながら、実践の中で振り返りを積み重ね、例えば毎時間の振り返りでは、指標のD(キャリアプランニング能力)を項目として挙げ、学習内容と将

来とのつながりを実感することができていた。

実践において、この生徒は定期的な振り返りの中で、次のような成長と課題を記述していた。

成長したところ

○様々な視点からとらえることができたので、新たな発見がみつけられた。

今後の課題

○もう少し短くまとめて、分かりやすいようにする。おこったことを順になるように説明する。

様々な視点で見ることにより新たな発見につながり、学びが更に深まることを実感できたとわかる。一方で、得た学びをどのようにまとめ、説明するかという点を課題として挙げている。このようにして、自身の成長を踏まえた新たな課題を設定することで、更なる成長に向けて取り組んでいく姿勢を高めることができると考えられる。

これらの実践を経て、この生徒は生き方探究パスポート「あゆみ」に、次のような記述を残した。

印象に残った出来事や場面

○学業での課題を見つけた。

今後の課題

○勉強、未来の自分と向き合いながら生活する。

1年間を通して印象に残った出来事や場面を挙げる項目で、「学業での課題」について記述する生徒がいると予想していなかった。今までの振り返りと重ね合わせれば、課題に取り組む中で将来に向けてより一層成長していこうという意志が感じ取れる。今後は、今回の生き方探究パスポート「あゆみ」に記述した内容を生かし、次学年での取組につなげていくことが大切になるであろう。

以上より、本研究の実践が、生徒が学習面において成長を実感する材料を与えていることが示唆された。また、生徒の記述には、「基礎的・汎用的能力」に关わる内容が多くあり、振り返る際の視点として意識化されている様子もうかがえた。

(2) 生徒・研究協力員へのアンケート及び聞き取り調査から

実践後、生徒を対象にアンケートを実施した。以下に、その結果を順に取り上げ考察を加える。質問は大きく三つで、それぞれ選択式、記述式の項目がある。まずA校(社会科)から紹介する。

①社会科の授業（学習）を通して、自分は成長できた

表 4-1 アンケート結果①（自分は成長できた）

5段階評価	人数	割合 (N=24)	
5 (とても思う)	11	45.8	87.5
4 (やや思う)	10	41.7	
3 (どちらともいえない)	1	4.2	12.5
2 (あまり思わない)	2	8.3	
1 (まったく思わない)	0	0	

表 4-1 のように、8割以上の生徒が自身の成長を実感できたことがわかった。「具体的に、どのような点で成長できたと思いますか？」という記述式の質問には、次のような回答があった。

- 単元を貫く問いに対して自分の考えをまとめる点。
- 教科書の課題に関わる資料で知ったことを活用する力。
- 考える力、少し、できたと思う。まとめる力は、あまりできなかった。もっと成長する。

一番多かったのは、自分の考えをまとめる力がついたという内容であった。事前に指導者側が、「基礎的・汎用的能力」を意識化しつつ臨んだ授業展開が大きく影響しているものと考えられる。また、情報を集め、活用するという課題対応能力に関わる内容を、成長として挙げた生徒もいた。

上に挙げた中で、最後の回答は選択式で2（あまり思わない）を選んだ生徒の記述である。取り組みたい課題があるため、低めの自己評価となったが、少しできた点についても着目している。本研究の実践を通して、自分なりの基準で成長を実感することはできていたのではないかと考える。

②社会科の授業を通して学んだことは、他の場面でも生かすことができる

右段の表 4-2 のように、8割以上の生徒が、社会科の授業を通して学んだことを、他の場面でも生かすことができると感じていた。「基礎的・汎用的能力」は、学校生活における様々な場面で発揮される力である。その汎用性について、多くの生徒が実感を得ていることが明らかになった。

表 4-2 アンケート結果②（他の場面で生かせる）

5段階評価	人数	割合 (N=24)	
5 (とても思う)	9	37.5	87.5
4 (やや思う)	12	50.0	
3 (どちらともいえない)	2	8.3	12.5
2 (あまり思わない)	0	0	
1 (まったく思わない)	1	4.2	

「具体的に、どのようなことを他の場面で生かすことができると感じますか？」という記述式の質問には、次のような回答があった。

- つながりを考えたり、資料をみて探したりすることができる。
- 自分の意見・考えをまとめる場面で生かすことができる。
- 相手に自分の意見を伝える。

この質問では、「基礎的・汎用的能力」に関わる回答が多く記述されていた。上に挙げた3名の記述は、それぞれ課題対応能力、人間関係形成・社会形成能力に関わる内容である。また、将来仕事をする際に生かせると記述した生徒も数名いた。

③これからもっと社会科の授業（学習）に頑張っ て取り組みたい

表 4-3 アンケート結果③（これから頑張りたい）

5段階評価	人数	割合 (N=24)	
5 (とても思う)	16	66.6	95.8
4 (やや思う)	7	29.2	
3 (どちらともいえない)	1	4.2	4.2
2 (あまり思わない)	0	0	
1 (まったく思わない)	0	0	

表 4-3 のように、ほとんどの生徒が、社会科の授業（学習）を更に頑張りたいと感じていた。

「そのために、どんな力が大切だ（発揮したい、伸ばしたい）と感じましたか？」という記述式の質問には、「短時間で多くの情報を見つける」「わかりやすく人に伝える力」「自分の考えも一緒にまとめる力」等が挙がっていた。多くの生徒が「基礎的・汎用的能力」も視点とし、更なる成長を目指している様子をうかがい知ることができた。

次に、B校（数学科）の結果について取り上げる。アンケートの母数が更に少ないが、記述式の項目に生徒がまとめた内容とともに紹介する。

①数学科の授業（学習）を通して、自分は成長できた

表 4-4 アンケート結果①（自分は成長できた）

5段階評価	人数	割合（N=17）	
5（とても思う）	4	23.5	88.2
4（やや思う）	11	64.7	
3（どちらともいえない）	2	11.8	11.8
2（あまり思わない）	0	0	
1（まったく思わない）	0	0	

表 4-4 のように、ほとんどの生徒が自身の成長を実感できたことがわかった。「具体的に、どのような点で成長できたと思いますか？」という記述式の質問には、次のような回答があった。

○少しだけ、人に説明できるようになったところ。
 ○小学校のときより頑張ろうと思うことができる。分からないことを分かるようになること。
 ○勉強の面でも、もちろん成長できたと思うし、自分の考えを相手に分かりやすく伝えることが成長できたと思う。

一番多かったのは、以前より人に説明できるようになったという内容であった。また、2番目の記述のように、小学校のときと比べ成長を感じた、あるいは数学が好きになったという回答もあった。

そして、最後の回答のように、学力面でも「基礎的・汎用的能力」の視点でも成長できたという記述も見られた。

②数学科の授業を通して学んだことは、他の場面でも生かすことができる

右段の表 4-5 のように、7割ほどの生徒が、数学科の授業を通して学んだことを、他の場面でも生かすことができると感じており、汎用性について実感を得ていることが明らかになった。一方で3割ほどの生徒はあまり汎用性を実感できず、記述式の項目が空欄であった生徒も見られた。

表 4-5 アンケート結果②（他の場面で生かせる）

5段階評価	人数	割合（N=17）	
5（とても思う）	4	23.5	70.6
4（やや思う）	8	47.1	
3（どちらともいえない）	2	11.8	29.4
2（あまり思わない）	3	17.6	
1（まったく思わない）	0	0	

「具体的に、どのようなことを他の場面で生かすことができると思いますか？」という記述式の質問には、次のような回答があった。

○今後の数学だけでなく他の教科の計算や、グラフの見方などに使える。
 ○分からないところを他の人にきいたり、教えてあげたりする場面で、生かすことができると思いました。

他教科で生かすことができると記述した生徒は多かったが、「数学といえば計算」という見方が強い印象を受けた。肯定的な回答を記述した生徒は「基礎的・汎用的能力」を視点とした内容になっている傾向があり、今年度の実践を通して、3割ほどの生徒が指標にある能力の重要性を実感するまで至らなかったことは課題として残った。

③これからもっと数学科の授業（学習）に頑張りたい

表 4-6 アンケート結果③（これから頑張りたい）

5段階評価	人数	割合（N=17）	
5（とても思う）	5	29.4	70.6
4（やや思う）	7	41.2	
3（どちらともいえない）	5	29.4	29.4
2（あまり思わない）	0	0	
1（まったく思わない）	0	0	

表 4-6 のように、7割ほどの生徒が、数学科の授業（学習）を更に頑張りたいと感じていた。肯定的とはいえない回答をした生徒は3割ほどと、先述した質問②と同じ割合になった。質問②及び③の結果から、学んだ内容を他の場面で生かすことができるといふ汎用性の実感は、学習意欲に関係するのではないかと考察することができた。

質問③に関連して、「そのために、どんな力が大切だ(発揮したい, 伸ばしたい)と感じましたか?」という記述式の質問には、以下の回答があった。

○行き詰っても何がいけなかったのか、自分を振り返って改善に尽くすことのできる力。
○前は、できない、と思っていたことがあったけれど、基礎を理解したら、できるようになったことが増えたので、授業で理解することが大切だと感じました。

本研究では、各教科の学習における振り返りの充実を図った。ある生徒の記述において、自分を振り返ることの大切さについて触れられていたことは、一つの成果としてとらえている。

2番目の記述は、第3章で取り上げた生徒Aがまとめた内容である。数学科の授業においてできることが増え、それが自身の成長の実感や、授業の大切さを実感することにつながっている。

このような、「できるようになった」という実感こそが、その生徒なりの成長の実感であり、そうした成長を積み重ねることで、授業に対する意欲を高めていくことにつながると考えられる。

一方で、研究協力員には、聞き取り調査を行った。その内容を、以下に質問項目別にまとめる。

○実践を通して、生徒が変わったと感じる部分

学習に対し見通しをもち、予測して動くようになったと思う。それは「基礎的・汎用的能力」はもちろんのこと、社会科において必要な視点(見方・考え方)も働かせつつ、生徒自身が自分たちで関連付けることができるようになってきたからであると感じる。振り返りについても書きぶりが定着し、間違いなくプラスになっている。

○実践を通して、良かったことや新たな発見

指導者としての認識が変わったと思う。自分自身の成長が生徒に返っていくことを強く感じた。事前に準備して取り組み、振り返って次につなげることで成長できると、指導者自身が実感した。

また、キャリア教育の視点によって、意識的に5年後、10年後をとらえることができ、それを意識するだけで全然違う(生徒が出会ってはいるが意識できない部分もあるので)。「基礎的・汎用的能力」はだんだんと擦り込まれていくもので、可能性を広げるプロセスの一つであると感じた。

○「基礎的・汎用的能力」についての理解

授業等を実施する前にイメージでき、見通しという意味で全然違う。生徒・指導者双方が見通しをもてることで、シンクロするように伝わっていくのだと思う。「基礎的・汎用的能力」の内容については、古くからやってきていることだが明確に見える化したものとして認識・理解している。

研究協力員は実践を通し、「基礎的・汎用的能力」を意識化することで授業等での見通しがもて、それが生徒にも伝わっていくことを実感していた。

「基礎的・汎用的能力」が生徒・指導者双方に見通しをもたせることにつながるという気付きを得ることができたのは、本研究における一つの成果であると考えられる。

本節の締め括りとして、研究の成果をまとめる。本研究では、「基礎的・汎用的能力」を視点として、生徒・指導者双方に付けたい力を共有した。その結果、生徒にとっては活動のプロセスに注目する機会へとつながり、一人一人が自分なりの基準で成長を実感する姿が見られた。加えて、次の活動に対し、意欲を高めている様子もあった。

そして、指導者にとっては、指標を活用しつつ計画段階で意識化することで、見通しをもって授業に臨むことにつながった。また、授業中に生徒が何を頑張ろうとしていたか、成長を見取ったり、価値付けたりする視点としても、「基礎的・汎用的能力」が大きな役割を果たした。

第2節 課題と今後の展望

(1) 実践から明らかになった課題

本研究を通して、活動のプロセスに注目し、成長を実感する生徒の育成に向けて、「基礎的・汎用的能力」が大きな役割を果たすことが示唆された。しかし、以下のような課題も明らかになった。

○指標の活用法及び留意点の蓄積・検証

研究協力校において、「基礎的・汎用的能力」の指標を丁寧に導入していただいた。その結果、生徒にとって指標に示された内容を自分事としてとらえることにつながったが、振り返りの場面における指標の影響力は予想以上に強かった。

実践ではこの点について途中で軌道修正を行い、教科目標に対する振り返りが最重要であることを指導者から明示した。ただ、本研究で理想とした、「基礎的・汎用的能力」を発揮したことで、目標

を達成する（達成に近づく）ことができたという内容の振り返りを実現することは難しかった。

理想の振り返りを目指すには、指標の提示とともに、指導者側がねらいとする振り返りの内容も具体的に示す必要があったと考える。記述の要点だけでなく、具体例があることで生徒への手だてとなった可能性がある。

また、本稿で記載できていない教科であるが、研究協力校の国語科教員より、一部の行動指標について表現を変えて実施することは可能か質問を受けた。この指標に示す内容が絶対でないこと、指標をひな形とし、生徒・指導者によって自由に加筆・修正し作り上げてよいこと等が留意点として挙げられる。こうした点も視野に入れ、より創意工夫された実践を蓄積する必要があるだろう。

○振り返りの更なる充実

研究協力校ごとに、振り返りの形式が異なるものとなった。具体的には、A校では単元ごとの、B校では毎時間ごとの振り返りにおいて「基礎的・汎用的能力」の指標を活用した振り返りを行った。それぞれに意図をもって、異なる形の振り返り形式にしたことは先述したとおりである。

実践を通して、毎時間の振り返りの中では、教科目標と「基礎的・汎用的能力」との接点を具体的に記述するような生徒の姿はあまり見られなかった。「基礎的・汎用的能力」は短期的に育まれるものではないため、ある程度の期間を設定し、振り返りを行う方が効果的であるように映った。

また、本研究では「基礎的・汎用的能力」の意識化を促すことも考え、教科目標と「基礎的・汎用的能力」の振り返りを分けて設定した。先述した内容と重なるが、振り返りの理想は、そのように分けて設定しなくとも、教科目標に対する振り返りの中に「基礎的・汎用的能力」の要素が出てくることである。こうした振り返りを実現すべく、今後も継続的に取り組む必要があると考える。

（2）今後に向けて

前項で取り上げた本研究における課題を踏まえ、今後の展望を2点に分けて述べる。

○数学科、社会科以外での授業実践

本研究において、各教科の学習で実践するキャリア教育の例示ができたと考える。1年次の研究と合わせれば、学校行事及び特定の教科において実践を積み重ねることができたといえる。

今後は、特に数学科、社会科以外の教科において実践を行うことが必要である。本研究では、どちらの教科においても人間関係形成・社会形成能力及び課題対応能力を、行動指標として挙げる生徒が多かったが、他教科において違いはあるのか、そして指標の汎用性を検証できればと考える。

○校種間連携を意識した実践

本研究では、活動のプロセスに注目し、成長を実感する生徒の育成を目指すため、「基礎的・汎用的能力」を視点とした。端的に言えば、授業を通して「付けたい力」を明確にし、生徒・指導者双方に意識化する実践であったと振り返る。

このように考えたとき、異なる校種において、どのような力を大切にして学校教育が行われてきたのか（生徒がどのように自覚しているのか）、あるいは将来に向けて、どのような力を育むことが想定されているのかという内容を理解しておくことはとても大切であると考えられる。本研究では言及できなかったが、生き方探究パスポートの取組も加味し、今後は校種間連携もより視野に入れつつ研究を進めていくことが大切であろう。

おわりに

先述した研究協力員への聞き取り調査での内容が心に残っている。「基礎的・汎用的能力」は、古くから学校教育において実践されてきた内容で、ともすれば「言わずもがな」であるのかもしれない。しかし、それらの能力を意識化して授業に臨むことが大切であると、研究を通して強く感じた。

その方策として、本研究では「基礎的・汎用的能力」の指標を提示した。生徒が「基礎的・汎用的能力」の意識化を通して、活動のプロセスに注目し、成長を実感する姿につながったことが、少しでも発信できていれば嬉しく思う。また、今回提示した指標は決してこれが完成版ではなく、改良すべき点もあると考える。是非様々な学校で取り組んでいただき、この指標をひな形として各校の工夫が加えられることにより、多くの学校に実践の輪が広がればこれに勝る喜びはない。

最後に、本研究における実践を通して、生徒が活動のプロセスに注目し、少しでも成長を実感する姿が見られることを目指し、共に話し合いを重ね、貴重なご意見、そして実践をいただいた研究協力校の皆様へ心より感謝申し上げます。